

各地で話題の病虫害

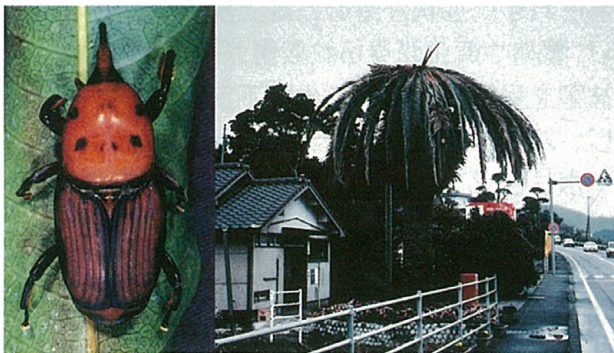
ヤシオオオサゾウムシ

学名：*Rhynchophorus ferrugineus* (OLIVIER)

英名：red palm weevil

1998年8月、宮崎県南部の日南海岸に植栽されたフェニックス（カナリーヤシ）の成木が立ち枯れる被害が発生し、内部を食害しているゾウムシはヤシオオオサゾウムシであることが判明した。本種はインド、東南アジア、ハワイ、オーストラリアなどに分布し、ヤシ類の害虫として知られており、我が国では1975年に沖縄県で初めて発生が確認された。宮崎県における発生は国内2例目で、2000年10月までに63本の被害が認められている。

成虫は体長32mm内外で、赤褐色～暗褐色の



宮崎県総合農業試験場 阿万暢彦氏提供

ビロード状光沢がある。幼虫は乳白色の太いイモムシ状で老熟すると5～6cmに達する。

雌成虫はヤシ類の幹の傷口や生長点部分に孔をあけ産卵し、幼虫は虫孔をつくり食害する。特に生長点からの被害がひどく、最上部から上方に伸長する新葉がなくなり、残った古い葉は下垂し、枯死に至る。

防除対策として被害木の伐採焼却や産卵防止のための漁網ネット処理などが行われ、被害量は減少している。宮崎県総合農業試験場の試験ではMEP乳剤など6剤が若齢幼虫に有効であることが確認されている。

本虫はその後、鹿児島県、福岡県及び岡山県でも発生が確認されており、今後の発生動向に注意する必要がある。

トマト萎ちょう病菌レース3

学名：*Fusarium oxysporum f.sp. lycopersici*

英名：Fusarium wilt

1997年2月、福岡県内の促成栽培ほ場においてトマト萎ちょう病菌レース1及びレース2抵抗性台木に接木したトマト株で激しい萎ちょう症状が認められた。萎ちょう株の維管束褐変部から分離された菌株は福岡県農業総合試験場などによる試験の結果、トマトのみを侵すトマト萎ちょう病菌 *Fusarium oxysporum f.sp. lycopersici* と同定された。また、レース1又はレース2抵抗性のトマト品種に強い病原性を示し、米国で育成されたレース3抵抗性品種を侵さなかったことなどから、そのレースはオーストラリア、



福岡県農業総合試験場 石井貴明氏提供

米国等で発生し、国内では未確認であったレース3であることが明らかになった。

病徴はトマト萎ちょう病の典型的な症状を示し、下葉が黄化し、次第に上葉に及んでいく。維管束の褐変は先端の茎部まで及ぶ。激しい場合は枯死する場合もある。

我が国では、レース1及びレース2によるトマト萎ちょう病は以前から発生しており、抵抗性のトマト品種や台木の普及が図られ、高い防除効果を上げている。レース3についても抵抗性台木品種の利用が開始され、現地でその効力を発揮し始めている。

レース3の発生は現在、福岡県南部の一部地域に限られているが、新たな地域で発生した場合の早期発見に十分な注意を払う必要がある。